みやもとだより

第31号　令和2年2月発行

季節のおまつり

浦佐毘沙門堂裸押合大祭

上越新幹線浦佐駅を降りると露店が並ぶなか三百メートルほど雪道を行くと毘沙門堂に着く。祭礼当日は朝から稚児行列、大名行列の堂入りや、御開帳、護摩法要が行われる。昼から午後三時頃にかけて、毘沙門天の御堂の屋根から、講中総出で作り護摩の加持が込められた福餅が何回かに分けて撒かれる。これを授かると一年間「除災招福」になるとして皆取り合う。毘沙門堂は大同二年（八〇七年）、坂上田村麿が北方平定に感謝して守り本尊の毘沙門天をこの地にお祀りし、祝宴を催したのが始まりと言われている。

大蝋燭を灯し待機する

夕やみ迫る六時頃になると、境内には「水行」参拝の多聞青年団の若者たちが白装束で集まり、「サンヨー、サンヨ」の掛け声とともに雪道を不動明王像の前まで進む。その周りを付き人たちが火の点った巨大な蝋燭を抱えて進む。奉納された百数十本の蝋燭は高さ一メートル、重さ約三十キロもある。水垢離をとり躰から湯気を立ち上がらせた若者たちは、毘沙門堂になだれ込む。立錐の余地もない堂内の四隅高所には大蝋燭が灯されている。

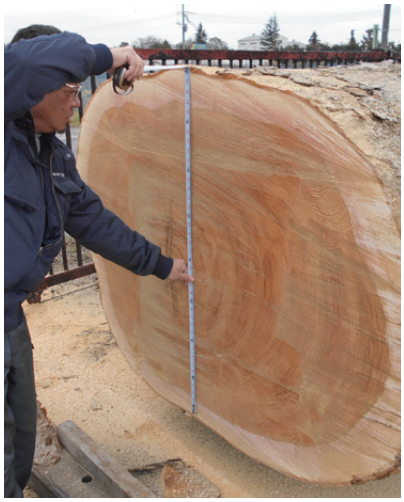
午後七時頃から押合いが始まり、毘沙門天になり代わり年男や奉納者が押合う裸衆に福物を撒与（さんよ）する。サンヨの掛け声はここからきている。この奪い合いは男の意地であり授かると親類縁者で祝杯を挙げる。祭りの見どころの神事「ささらすり」は烏帽子に狩衣姿の年男が人馬にまたがり入堂すると、押合っていた裸衆は輪を作って取囲み、足を踏み「サンヨー、サンヨ」の掛け声で踊り、その年の豊作を祈願する。日本三大奇祭の一つとも言われ、毎年三月上旬に開催される。

（写真・文　宮本卯之助）

毘沙門天を守る青年団と男衆の押合い

太鼓むかしばなし

欅の原木



欅の原木

太鼓づくりは最良の材を求めることに始まります。太鼓の胴としては、欅、セン、タモ、栃などが用いられますが、それらは葉が落ちてから新芽がでるまでの間の一、二月頃に原木を伐り出します。最も適した材は欅で、厳しい環境の中で、長い年月をかけて育った欅は、太さ丸みなど太鼓に適したものは樹齢百年以上経ったものです。欅は日本固有の木で、アジアをはじめ外国には同じような堅さや木目の美しいものは無く同じものは二つとありません。一本一本特徴をもった自然の素材を、それぞれに見極め、いかに仕上げるかは、職人の長年培ってきた技術と経験によります。永きにわたり職人たちが受け継いできた太鼓づくりの経験と選ばれた欅から、宮本の太鼓判「太卯」に恥じない一品へ。日々職人たちが向き合っております。

浅草徒然にっき

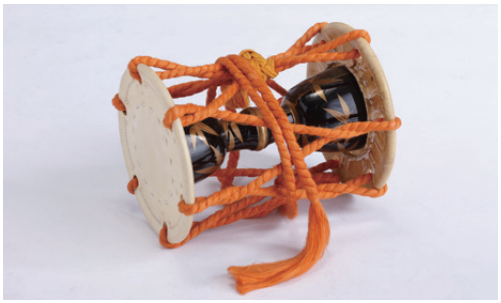
節分

浅草寺では毎年二月三日節分会を行っています。ご本尊の観音様の前には鬼もいないとのいわれにちなみ、豆まきの発声は「千秋万歳、福は内」で、「鬼は外」とは唱えません。江戸時代より、法要と豆まきに加え、節分祈祷の守札も授与されてきました。近年は隣の浅草神社の神楽殿でも年男、年女が「福は内」と豆まきをし、いまも昔も変わらぬ浅草の賑わいです。

古典芸能へのとびら

大鼓

水野年方の浮世絵



大鼓「竹の蒔絵胴」

大鼓は「おおつづみ」とも「おおかわ」とも呼ばれています。能楽囃子や歌舞伎囃子、各地の祭囃子や民俗芸能に用いられています。まるで金属音のようなカーンと鋭い高音が特徴です。桜材の胴に馬皮を当て、麻の調べ緒を締めて組み上げます。演奏にあたっては、皮を二時間ほど炭火や電熱器で焙(ほう)じ、調べ緒を限界までできつく締め上げます。大鼓の皮は強く丈夫ですが、打てば打つほど消耗し、能楽では五～十曲ほど演奏するとその役目を終えると言われています。

能楽が大成した室町期以前の平安末期に起こった歌舞の一種で、今様や朗詠に合わせて女性が舞ったことも含めて「白拍子」と言い、写真は白拍子が大鼓を抱え打っています。囃子方演奏者が数百年と受け継いできた音色を繋ぎ続けていくため、職人たちは日々研鑽に努め、皮の仕込みから大鼓皮縫いの一針一針まで、心を込めて縫い上げています。

東京では梅も見頃となり、日増しに暖かさも感じられるようになる三月、まだ雪が残る新潟県南魚沼市を訪れました。日本にはこの寒い時期に「裸祭り」と称するものがいくつかありますが、江戸時代に著された『北越雪譜』にも、越後魚沼の雪国の生活が活写されており、毘沙門堂裸押合祭りは、当時男は下帯姿、女は浴衣を着て堂内に入り押合い、まるで蒸し風呂のような状態であったと、記されております。今は男だけですが、古びた御堂で、大ローソク、水垢離、押合いと盛り沢山のお祭りでした。

古来、太鼓は日本人の祈りと共にあり、人々の魂を奮わせ、心を癒し、繋いできました。最良の材にこだわり、自然の恵みに感謝し、伝統の製法にこだわる。幾代にもわたって作られてきた大小さまざまな太鼓の胴は、宮本に脈々と伝わる想いとともに、その出番を待っています。

宮本卯之助

発行
株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一－〇〇三五
東京都台東区西浅草 二－一一－一一
電話 〇三－三八四四－二二四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp